

重唇音の軽唇音化について(4)
—唐代の資料(補説：C類韻とB類韻の合流)—

吉池孝一・中村雅之

1. はじめに

吉池：今回は、唐代の反切で軽唇音化をうかがうことのできる資料について、平山久雄(1967)¹の議論の妥当性を中心に検討しました。

中村：音韻観の違いもさることながら、方法論として、類一致と軽唇音化の区別や、韻母の合流と軽唇音化の認定についての問題点が浮き彫りになったかと思います。

吉池：韻母の合流と軽唇音化の認定については問題点を提示しつつ、もう少し議論する必要がありそうだ、というところで終わりました。

中村：特に「慧琳音義」のC類韻>B類韻の韻母の合流をもって、軽唇音が音韻的に“独立”したとする点については確認が必要であるということでした。今回は、唐代の反切資料に関する補説として、その点を議論しましょう。

2. C類韻とB類韻の合流の方向

吉池：平山氏は、河野六郎(1964)²の提示する切韻>慧琳音義の韻の合流をまとめた表の記述によって、慧琳音義(784-807年)のC類>B類の韻母の合流について議論を進めます。河野氏によると次のとおりです。韻目は広韻によります。

なお、河野六郎(1964)は之(止・未)に甲乙の別を認め重紐韻の扱いをしますが、平山久雄(1967b)「中古漢語の音韻」³によりC類韻として処理します。

- ・元(阮・願・月) > 仙(獮・線・薛)
- ・嚴(儼・釅・業) > 鹽(琰・豔・葉)
- ・廢 > 祭
- ・欣(隱・焮・迄) > 眞(軫・震・質)
- ・微(尾・未)・【之(止・未)】 > 支(紙・寘)・脂(旨・至)
- ・文(吻・問・物) > 諄(準・稕・術)

¹ 平山久雄(1967)「唐代音韻史に於ける軽唇音化の問題」『北海道大學文學部紀要』15-2、3(240)-59(184)頁。

² 河野六郎(1964-1965)「朝鮮漢字音の研究」I-IV、『朝鮮学報』。『河野六郎著作集 2 中国音韻学論文集』東京：平凡社1979年295-512頁所収の論文、498-503頁の表による。

³ 平山久雄(1967b)「中古漢語の音韻」『中国文化叢書1 言語』、大修館書店。

中村：河野氏は、C類韻とB類韻の合流の方向を、C類韻>B類韻とするわけですか。

吉池：提示された「5・3 総括」の表にある、切韻から慧琳への、C類韻とB類韻の合流を示すと次のとおりです。なお、切韻>慧琳、乙はB類で無記はC類です。以下同様。

- ・ 開口：仙乙-*ǰän* と元-*ǰen* > 仙乙-*ǰan*
- ・ 合口：仙乙-*ǰän* と元-*ǰen* > 仙乙-*ǰan*
- ・ 開口：鹽乙-*ǰäm* と嚴（凡）-*ǰem* > 鹽乙-*ǰan*（-*ǰam*の誤記か）
- ・ 開口：祭乙-*ǰäi* と廢-*ǰei* > 祭乙-*ǰai*
- ・ 合口：祭乙-*ǰäi* と廢-*ǰei* > 祭乙-*ǰai*

中村：いずれも“韻目の表記”では、例えば元【C類】>仙乙【B類】の結果として、慧琳では仙乙【B類】となったようにあります。しかし音価を見ると、合流の結果として、主母音はB類のäでもなく、C類のeでもなく、新たなaとなっています。この合流の方向は、C類>B類でもB類>C類でもなく、C類≠B類>別の韻（C類=B類）とでもせざるを得ません。他の韻はいかがでしょう。

吉池：次のとおりです。

- ・ 開口：眞乙-*ǰen* と欣-*ǰen* > 眞乙-*ǰen*
- ・ 合口：諄乙-*ǰen* と文-*ǰen* > 諄乙-*ǰen*
- ・ 開口：支乙-*ǰe*・脂乙-*ǰei* と【之乙-*ǰei*】・微-*ǰei* > 脂乙-*ǰei*
- ・ 合口：支乙-*ǰe*・脂乙-*ǰei* と微-*ǰei* > 脂乙-*ǰei*

中村：これも“韻目の表記”では、例えば欣【C類】>眞乙【B類】の結果として、慧琳では眞乙【B類】となったようにあります。しかし音価を見ると、【之乙-*ǰei*】を除き、合流の結果として、主母音はC類のəとなっています。この合流の方向は、B類>C類とせざるを得ません。

このような合流の状況について河野氏はどのような見方をしているのでしょうか。

吉池：河野六郎(1964-1965)の「5・2・4・1 臻撰」の説明において次のようにあります。「朝鮮音の状況はここでも慧琳と極めてよく一致する。即ち慧琳と同じく眞乙と欣とが合流して、眞の甲：乙のみが反映される。上表(p.469)では慧琳では皆 -*ǰə-*【甲類(A類)】、-*ǰə-*【乙類(B類)】に統一される様に示したが、実際は合流の結果皆 -*ǰə-*、-*ǰə-* になったのか、或いは逆に -*ǰe-*、-*ǰe-* になったのか判定し難い。又 -*ǰə-*、-*ǰə-* と解釈されてもそのV(a)の具体的音価は合流前の音価と同一であるかどうか疑問である。」(473頁)。

中村：この一節は、臻撰すなわち、上の「開口：眞乙-*ǰen* と欣-*ǰen* > 眞乙-*ǰen*」と「合口：

諄_乙-ĩ^wən と文-ĩ^wən>諄_乙-ĩ^wən」について言ったものですが、C類とB類の合流の方向については判定し難い。また合流後の主母音の音価の詳細についても確かなことは言えない、ということですね。

吉池：C類とB類の合流の方向について、はっきりとは分からないとしつつも、音価を与えています。その音価が何に拠るものか。中古音、唐代音、近世音の体系を考慮した別の議論が必要なのでしょうか。

中村：河野氏の立場は「5・2・4・1 臻撰」の説明で明瞭なのですが、平山氏は、平山久雄(1967)による限り、合流の方向は一貫してC類韻>B類韻のようですね。

吉池：もっとも、平山久雄(1967b)「中古漢語の音韻」では下記のようにです。

「C類韻母のB類韻母への合流。中舌・奥舌主母音（音韻論的には奥舌主母音）を含む拗音韻母を、唇・牙喉音声母と結合する場合にかぎり、さきに〈C類〉と名付けたが、C類韻母は同撰内のB類韻母に合流した。例えば欣韻 iǎn>真韻 iĕn (臻撰)，元韻 iAn>仙韻 iEn (山撰)。同撰内にB類韻母がないときはそのまま残った。陽韻 iaq (宕撰)，東_三韻 iǎuŋ (通撰)などがそれである（合流の方向については議論の余地がある。いま仮りに上記の如き方向と考えてのことである。）」(159頁)。

中村：要するに、C類韻>B類韻とするのは仮の処置で、積極的な根拠はないということですね。

吉池：平山久雄(2022)『中古音講義』⁴では、『慧琳音義』における韻母の合流について、変化の方向が明らかな場合は“>”を用い、そうでない場合は“=”を用います。B類韻母とC類韻母の合流については下記のように“=”を用います。

「 B類韻母とC類韻母の合流

同撰内のB類韻母とC類韻母は合流した。

止撰：脂_B=之=微

蟹撰：祭_B=廢

臻撰：眞_{開B}質_{開B}=欣迄、眞_{合B}質_{合B}=文物

山撰：仙_B=元

流撰：幽_B=尤

咸撰：鹽_B葉_B=嚴業

」(158頁)

⁴ 平山久雄(2022)『中古音講義』汲古書院。あとがきによると1980年代から1990年代にかけて主に東京大学で行った講義の記録であるという。

中村：韻母の合流の如何について反切を検討する場合、C類韻＞B類韻であるかC類韻＝B類韻であるかによってだいぶ方法は異なるので、我々が何れの立場に立って反切を検討するかは大事な所です。

吉池：C類韻＞B類韻とする根拠を明示するのは困難です。C類韻とB類韻は合流した、即ちC類韻＝B類韻ということで反切の検討をするのが穏当ではないでしょうか。

中村：なお、初期の切韻系韻書では、文（吻・問・物）韻と諄（準・稕・術）韻は、それぞれ欣（隱・焮・迄）韻と眞（軫・震・質）韻に含まれるが、広韻では分かれます。河野六郎（1964）はその広韻によるので、やや複雑となりますが、そのまま検討しましょう。

3. 二種のC類韻

中村：ところで、ここに挙がる元（阮・願・月）等のC類韻は全ていわゆる“純三等韻”ですね。

吉池：そうなんです。中舌主母音が想定される拗音三等韻の唇・牙喉音音節をC類韻と呼び、その唇音声母は軽唇音化するわけですが、軽唇音化するC類韻には二種類あります。唇牙喉音声母の音節のみの“純三等韻”と、唇牙喉音声母と舌歯音声母の音節も含むいわゆる“三四等単韻”です。

中村：三四等単韻は「東屋、鍾燭、陽藥、蒸職、魚、虞、之、麻」などの韻ですね。現代北京語のピンインで軽唇音声母の音節の一部を例示すると、東韻の「風」feng、屋韻の「福」fu、鍾韻の「封」feng、燭韻の「幙」fu、陽韻の「方」fang、藥韻の「縛」fuなどとなります。

吉池：重紐韻が含まれる撰の中に、三四等単韻（之は除く）は含まれません。他方、純三等韻は同撰の中に含まれるので韻の合流の候補は主に純三等韻ということになります。どうしてB類韻と同じ撰に純三等韻が含まれるのか、両者にはどのような関係があるのか（無いのか）気になるところです。

中村：あるいは音韻史上の問題であるかもしれませんが、本題と離れるので別の機会に検討しましょう。いずれにしても、唐代の音変化として、「C類韻母のB類韻母への合流」（平山久雄「中古漢語の音韻」）とすると、分かっている人にとっては言うまでもないことなのでしょうが、誤解を生みやすい表現ではあります。C類韻母（主に純三等韻）とB類韻母の合流としたならば誤解は生じないでしょう。

吉池：その点について、古屋昭弘(2022)⁵の項目「中古中国語」に次のようにあります。

「唐になると、標準読書音の基礎方言の地位は次第に西北の長安に移る。そのことを如実に示す資料が慧琳《一切経音義》(800年頃)である。その反切により、1等重韻や2等重韻の合流、3等韻重紐A類と4等韻の合流、3等韻重紐B類と純3等韻の合流、流撰3等韻唇音字の遇撰への合流など多くのことがわかる。」(7頁)。

中村：合流の方向については慎重な表現となっていますが、ここでいう「純3等韻」はいわゆるC類韻なので、B類韻とC類韻の関係については、「3等韻重紐B類と純3等韻の合流」という表現により明瞭です。

吉池：「慧琳音義」の反切については、上田正(1987)⁶がまとめた表により、それを調査して議論したいと思うのですが、上田氏は純三等韻をD類として、他のC類から区別します。平山久雄(1967)はC類韻>B類韻への韻の合流として議論を進め、また他の研究者もC類として議論を進めるので、ここでは煩雑となることを避けて、上田氏を引用する場合D類をすべてC類として提示します。

中村：それでは次に、C類韻(主に純三等韻)とB類韻の韻の合流において、唇・牙喉音の音節ではどのようなであったかを上田正(1987)によって確認しましょう。

3. 唇音声母と牙喉音声母の音節にみる韻の合流

吉池：上田正(1987)によって、唇音被切字と牙喉音被切字におけるC類とB類の合流の状況を見ると次のとおりです。

表の見方ですが、唇音被切字と牙喉音被切字をそれぞれ反切と直音に分けました。上田氏は反切が付された被切字を主なものとして、それ以外に附録として直音が付されたものを集計しています。「C類 平声元韻」の唇音音節の下の0(ゼロ)は、当該韻の唇音被切字の反切下字中にB類韻の反切下字を取る例は無いということです。牙喉音被切字の下の1は、当該韻の牙喉音被切字の反切下字中にB類韻の反切下字を取る例は1ということです。唇音被切字の下方にある【音節無し】は唇音の音節自体が無いことを示します。牙喉音被切字の下方にある【音節無し】も同様です。「C類 上声儼韻」の右横の【項目無し】は、上田正(1987)の表に上声儼韻が無いことを示します。

⁵ 古屋昭弘(2022)「中古中国語」『中国語学辞典』(日本中国語学会編)岩波書店、6-10頁。

⁶ 上田正(1987)『慧琳反切總覽』汲古書院。

表 1. 唇音被切字と牙喉音被切字にみる韻の合流

	唇音被切字		牙喉音被切字	
	C, B 合流の例数		C, B 合流の例数	
	反切	直音	反切	直音
C類				
1. 平声元韻	0	0	1	1
2. 上声阮韻	0	0	5	0
3. 去声願韻	0	0	6	1
4. 入声月韻	0	0	1	0
B類				
5. 平声仙韻	0	【音節無し】	13	2
6. 上声彌韻	0	0	0	0
7. 去声線韻	0	0	6	0
8. 入声薛韻	0	【音節無し】	4	0
C類				
9. 平声嚴韻	【音節無し】	【項目無し】	1	【項目無し】
10. 上声儼韻	【項目無し】	【音節無し】	【項目無し】	0
11. 去声釅韻	【音節無し】	【項目無し】	0	【項目無し】
12. 入声業韻	【音節無し】	【音節無し】	0	0
B類				
13. 平声鹽韻	0	【音節無し】	3	【音節無し】
14. 上声琰韻	0	【音節無し】	0	1
15. 去声豔韻	0		【音節無し】	
16. 入声葉韻	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】
C類				
17. 去声廢韻	0	0	14	【音節無し】
B類				
18. 去声祭韻	【音節無し】	【音節無し】	10	0
C類				
19. 平声欣韻	【音節無し】	【音節無し】	6	3
20. 上声隱韻	【音節無し】	【音節無し】	0	0
21. 去声焮韻	【音節無し】	【項目無し】	2	【項目無し】
22. 入声迄韻	【音節無し】	【音節無し】	5	0
B類				
23. 平声眞韻	0	0	2	4
24. 上声軫韻	0	0	0	1

25. 去声震韻	【音節無し】	【音節無し】	9	2
26. 入声質韻	0	【音節無し】	1	0
C類				
27. 平声之韻	【音節無し】	【音節無し】	10	0
28. 上声止韻	【音節無し】	【音節無し】	0	0
29. 去声志韻	【音節無し】	【音節無し】	1	0
30. 平声微韻	0	0	11	0
31. 上声尾韻	0	0	5	4
32. 去声未韻	0	0	6	1
B類				
33. 平声支韻	0	0	15	13
34. 上声紙韻	0	0	19	2
35. 去声寘韻	0	0	6	1
36. 平声脂韻	0	0	7 (内羊母 5)	4
37. 上声旨韻	0	0	14	4
38. 去声至韻	1	0	14	7
C類				
39. 平声文韻	0	0	0	0
40. 上声吻韻	0	【項目無し】	4	【項目無し】
41. 去声問韻	0	0	1	0
42. 入声物韻	0	0	4	0
B類				
43. 平声諄韻	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】
44. 上声準韻	【音節無し】	【音節無し】	0	【音節無し】
45. 去声稕韻	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】
46. 入声術韻	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】	【音節無し】

中村：反切から得られる結果と、直音から得られる結果との間に矛盾はなさそうです。

吉池 14 と 24 の直音の例は反切を補足していますが、これが無くとも、特段の不都合は生じません。複雑となることを避けるために、今後の検討においては反切のみを使用したいと思います。

中村：一見する限り、唇音被切字にC類とB類の合流はなく、牙喉音被切字にはC類とB類の合流がある、ということになりそうです。

吉池：そうなると、慧琳音義の反切において軽唇音化の音韻的独立が見られるという平山説

は理論的に成り立つのでしょうか。

中村：少なくとも表1によれば、唇音に関しては33至韻の1例以外にC類とB類の合流は確認できません。牙喉音における状況とは鮮明な対比を示しています。したがって、C類とB類の合流を経て初めて重唇音と軽唇音が音韻的に対立した、つまり軽唇音が音韻的に独立した、という平山説は反切からは確認できないこととなります。平山氏は慧琳音義においては同撰内のC類とB類が合流していたと見なしますが、唇音に関してはそれを反切から直接に論証できない状況です。平山久雄(1967)において、「例えば、文韻平声幫母字「分」(C類) /p̄jiu_{an} 平/と真韻平声幫母B類字「斌」 /pien 平/の区別は、韻母合流ののちにも「分」 /fien 平/ : 「斌」 /pien 平/に於ける声母/f/ : /p/の差異として、依然保たれたのである。これを逆に言うならば、軽唇音の音韻としての独立は、韻母に於けるC類>B類の合流に伴ってはじめて生じたのである。」(19頁)と述べているのは、唇音においてもC類とB類が合流していたであろうという平山氏の根拠なき想像によるものと言わざるを得ません。唇音と牙喉音における合流の状況が異なることは表1が如実に示しているように見えます。

4. 唇音被切字の反切下字と牙喉音字の使用

中村：表1からは唇音におけるC類とB類の合流は見て取れないのですが、もう少し確認しておくべきことがあります。それは唇音被切字の反切下字に牙喉音字が使用されていないかどうかです。牙喉音においてはC類とB類の韻母が合流していたと見られるのですから、もしも唇音のC類被切字とB類被切字の双方に牙喉音の下字が使用されていれば、理論上、唇音においてもC類とB類が合流していたこととなります。つまり、表1から明らかなように、牙喉音ではC類=B類なので、唇音のC類被切字とB類被切字の双方に牙喉音(C類=B類)の下字があれば、唇音韻母もC類=B類という理屈です。

吉池：確かにそのとおりですね。気がつきませんでした。確認しましょう。まずは表1の1~8(山撰)です。以下()で反切を指すことにします。

元(阮・願・月)と仙(獮・線・薛)

1. C類平声元韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは次の1例。于母合口三等の爰(遠權)。權はB類平声仙韻字であるから、C類爰はB類と合流している。

他方、唇音被切字には幫母、滂母、並母、明母があるが、反切下字に牙喉音を使用するのは11例。滂母の翻(孚園)(孚元)、飜(孚袁)、旛(孚袁)、潘(發爰)、番(發袁)。並母の樊(伐袁)、繁(伐袁)(飯袁)、燔(伐袁)、饜(扶袁)。この中、爰および、爰と同音の袁が、C類韻とB類韻が合流したものであるから、滂母被切字と並母被切字の諸字は牙喉音字(C類=B類)と同じ韻母を持つ。幫母被切字と明母被切字の反切下字は唇音字のみであるが、滂母被切字と並母被切字の状況から見て、やはり牙喉音字と同じ韻母を持っていた

と判断される。

2. C類上声阮韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは次の5例。群母開口三等の鍵(渠彦)。疑母開口三等の獻(言審)と獻(言審)。影母合口三等の宛(寃院)と蜿(寃院)。彦は去声線韻、審は上声彌韻、院は去声線韻⁷でいずれもB類。

他方、唇音被切字には幫母、並母、明母があるが、反切下字に牙喉音を使用するものは2例。明母の挽(無遠)(亡遠)のみ。遠は于母合口三等で、上の合流例に含まれないから、B類韻との合流が明示されたものではない。したがって、反切下字の遠の使用をもって、直接にC類韻とB類韻の合流を証することはできないが、牙喉音被切字の5例(場合によっては3例。注7参照)の合流例をもって、牙喉音全体が合流していたと見て、于母合口三等の遠もB類と合流していたと見なすことが可能である。その場合、明母の挽(無遠)(亡遠)も牙喉音(C類=B類)と同じ韻母を持っていたと見なすことになり、他の唇音も同様であったと見なし得る。

3. C類去声願韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは次の6例。見母合口三等の變(厥瑗)。群母開口三等の健(渠彦)。疑母開口三等の這(言件)、合口三等の愿(原卷)。曉母合口三等の椽(暄院)。影母合口三等の怨(威院)。

他方、唇音被切字には、幫母、滂母、並母、明母があるが、反切下字に牙喉音を使用するものは0例。すべて唇音である。唇音被切字がB類韻と合流していた事を示す証拠は無い。

4. C類入声月韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは次の1例。影母開口三等の喝(薦夔)。夔は入声薛韻でB類。

他方、唇音被切字には、反切下字に牙喉音を使用するものは1例。伐(房越)。他はすべて唇音である。越は于母合口三等であるからB類韻との合流が明示されたものではない。反切下字越の使用をもって、直接にC類韻とB類韻の合流を証することはできないが、影母1例の合流例をもって、牙喉音全体が合流していたと見るならば、于母合口三等の越もB類と合流していたと見なすことも不可能ではない。その場合、C類月韻唇音も牙喉音(C類=B類)と同じ韻母を持っていたと見なしうる。

5. B類平声仙韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは次の13例。溪母開口三等の愆(羌言)(丘言)、憊(鳩言)、褰(羌言)、騫(去言)。群母合口三等の捲(倦袁)(狂袁)(卷袁)、拳(倦袁)(達袁)、攢(倦袁)(達袁)、瘥(倦袁)。言・袁は平声元韻でC類。

⁷ 鍵は濁音上声であり、音韻変化を反映して反切下字に去声の彦が用いられている。一方、宛と蜿の反切下字に院が用いられていることについては、上田氏は「下字阮譌坎」(下字の【院】は阮の誤か)と注記する。あるいは、集韻の上声阮韻に宛・蜿と同音の院があるので、慧琳音義の院には上声と去声の二音があったのかもしれない。院が、誤記あるいは上声であるとしたならば、合流例は二例少なくなる。

他方、唇音被切字には、幫母、滂母、並母、明母はあるが、反切下字に牙喉音を使用するものは0例。日母1例を除きすべて唇音である。唇音被切字がC類韻と合流していた事を示す証拠は無い。

6. B類上声彌韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは0例。

他方、唇音被切字には、並母、明母はあるが、反切下字に牙喉音を使用するものは0例。唇音被切字がC類韻と合流していた事を示す証拠は無い。

7. B類去声線韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは6例。見母合口三等の眷(厥願)(俱願)。群母合口三等の倦(達願)。疑母開口三等の彦(言建)、諺(言建)。于母合口三等の院(袁怨)。願・建・怨はいずれも去声願韻でC類。

他方、唇音被切字には、幫母、並母はあるが、反切下字に牙喉音を使用するものは0例。全て唇音である。唇音被切字がC類韻と合流していた事を示す証拠は無い。

8. B類入声薛韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは4例。疑母開口三等の𪔑(言羯)、𪔒(魚羯)、𪔓(言羯)、𪔔(言羯)。羯は入声月韻でC類。

他方、唇音被切字には反切下字に幫母、来母、章母はあるが牙喉音は0例。唇音被切字がC類韻と合流していた事を示す証拠は無い。

中村：以上から分かることは、山撰(1~8)においては、元韻(C類)の唇音字の韻母が仙韻・元韻の牙喉音字(B類=C類)の韻母と合流しているらしいということです。(平声で代表させる)一方、仙韻の唇音B類はそれらとは区別されています。つまり、次のような状況を想定することができます。(韻母の種類を○□△で表す。黒塗りは合流した韻母)

表 2. 山撰	仙韻A	仙韻B	元韻C
牙喉音	○	▲	▲
唇音	○	□	▲

表1では仙韻のA類は扱っていませんが、慧琳音義ではA類とB類の区別は原則として保たれています。しかし、仙韻B類の韻母の状況は牙喉音と唇音で違っており、牙喉音B類はC類の元韻と合流した。その際、仙韻B類>C類となったのか、仙韻B類とC類元韻がいずれでもない新しい韻母になったのかは不明です。前述の河野氏の想定(の山撰部分)は後者に相当します。一方、唇音について見れば、A類・B類・C類の区別は歴然としており、このような状況下では、軽唇音が音韻的に独立していたという平山説の前提である、B類とC類の合流は確認できません。

吉池：表2とその説明について納得するのが困難な部分があります。仙韻Aを○、仙韻Bを□、元韻Cを△とする記号の使用は一目で瞭然です。それによると、仙韻Bの牙喉音を▲とするのは、仙韻B類(□)>C類(△)が前提となっており、表2の説明でもそのようになって

います。C類とB類が合流したとする場合、合流の方向は、B類>C類、C類>B類、B類・C類>他の共通したX韻（これ以後BC類>X韻とする）という三つの可能性があります。そのうち、平山久雄(1967)はC類韻>B類韻とします。このC類>B類の可能性を排除する理由ですが、中村さんにとっては言うまでもないことなのでしょうが、第三者の目からすると必ずしも明瞭というわけではありません。

中村：仮にC類（△）>B類（□）を想定した場合、次のようになります。

表 2-1. 山撰(C類>B類)	仙韻A	仙韻B	元韻C
牙喉音	○	①■	②■
唇音	○	④□?	③■

上の①の反切下字にC類字を使用するのはC類>B類の合流の結果と見て、■となります。他方、②の反切下字にB類字を使用するのは、元韻Cの牙喉音被切字に音変化があり、B類となっていたと見ることができるので■となります。③の反切下字には、“本来”C類であった牙喉音字を使用しているのですが、このC類はB類と合流したもののなので■となります。問題は④です。C類>B類という仮定に立つならば、当然④も同じ韻母を持っていたこととなりますが、実際にはそれを示す例はありません。つまり、④の反切下字には、唇音C類字も、牙喉音B類字も、牙喉音C類字も全く用いられていません。したがって、与えられたデータの中には、C類>B類という方向を想定できる根拠が存在しないということです。

吉池：山撰の元（阮・願・月）と仙（彌・線・薛）では、B類>C類、C類>B類、BC類>X韻のうち、B類>C類とBC類>X韻は想定できるが、C類>B類は想定できないということですね。表2はB類>C類を表にしたもので、BC類>X韻は省略したということですね。このBC類>X韻を表にするならば次のようになるのでしょうか。

表 2-2. 山撰(BC類>X韻)	仙韻A	仙韻B	元韻C
牙喉音	○	①★	②★
唇音	○	④□	③★

①の反切下字にC類字を使用するのは、仙韻Bの牙喉音被切字がC類と合流してX韻に変化したことを示すので★となります。他方、②の反切下字にB類字を使用するのは、B類とC類が合流してX韻に変化したことを示すので★となります。③の反切下字にC類の“牙喉音字”を使用するのは、C類の唇音においてもB類とC類が合流してX韻に変化したことを示すので★となります。問題は④です。④の反切下字に牙喉音を使用しないのは仙韻Bの唇音被切字がX韻に変化していないことを示すので□のままです。

中村：BC類>X韻を想定した場合でも、唇音被切字にB類とC類の合流は見られません。

吉池：ところで表2について一つ疑問があります。元韻Cの唇音について、▲とあるけれど

も、これは△のほうが良いのではないのでしょうか。C類平声元韻の举例の1により被切字と反切を示すと次のとおりです。

牙喉音被切字・・・爰C（遠權 C←B）。權はB類平声仙韻字。

唇音被切字・・・潘C（發爰C）

合流の方向はB類>C類を前提としています。牙喉音被切字「爰」の反切下字にB類字「權」が使用されていますが、「權」はB類>C類の結果、C類字相当の字として使用されています。「爰（遠權）」はB類>C類という合流を示すので▲です。他方、唇音被切字「潘」の場合、反切下字にはB類字は使用されずC類字「爰」が使用されています。「爰」は被切字としては反切下字にB類字（C類相当として）を使用しているけれども、「潘（發爰）」にはB類>C類を証するものは何もありません。したがって△のままのほうが、得心が行きます。

中村：吉池さんは△と▲を、反切によって直接に合流が確認できるか否かによって区別しようとするわけですね。私は反切系聯法の手法を思い描いているので、系聯するものは全て黒塗りとします。

吉池：われわれが確認したいのは唇音におけるB類とC類の合流の有無なので、いずれの手法によっても結果に違いはなさそうです。また、私の手法だとやや複雑になるので、ここは中村さんによりましょう。

吉池：山撰の1～8については用例を挙げ詳しく検討しました。9以降はどうでしょうか。やや簡略にし、牙喉音の用例は数字のみとしたいのですが。

中村：それで結構です。唇音被切字に牙喉音字の反切下字がどの程度用いられているか、特にC類唇音とB類唇音の双方に牙喉音下字が用いられる撰があるかどうかという点は確認しておく必要があります。表2で排除したC類>B類という合流の方向が他の撰ではどのような状況であるかも含めて、唇音のC類とB類が合流していたかどうかを判断する材料となります。

吉池：承知しました。

5. 唇音被切字の牙喉音下字の概略

吉池：唇音被切字の牙喉音下字の概略は次のとおりです。牙喉音でB・C類韻と合流しているものの举例は略します。

嚴（儼・醜・業）と鹽（琰・豔・葉）

9. C類平声嚴韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは1例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

10. C類上声儼韻については項目自体がない。
11. C類去声齷韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音には被切字自体が無い。
12. C類入声業韻の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音には被切字自体が無い。
13. B類平声鹽韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは3例。他方の、唇音被切字には反切下字に牙喉音を使用するものは無い。
14. B類上声琰韻の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音被切字には反切下字に牙喉音を使用するものが3例。𦉳(彼檢)(筆奄)(兵奄)。
15. B類去声豔韻の牙喉音被切字は無い。他方の唇音被切字には反切下字に牙喉音を使用するものが2例。窆(悲驗)、砭(悲驗)。
16. B類入声葉韻の牙喉音被切字は無い。他方の唇音被切字も無い。

中村：嚴(儼・齷・業)と鹽(琰・豔・葉)は使える部分は少ないですね。9によるとC類の牙喉音被切字でB類韻と合流しているものは1例。13によるとB類の牙喉音被切字でC類韻と合流しているものは3例。14によるとB類の唇音被切字の下字にB類牙喉音を使用するものが3例。15によるとB類の唇音被切字にB類牙喉音を使用するものが2例。これをどのように見るかです。この咸摂では牙喉音被切字でC類とB類の合流が起こった可能性があり、それが唇音被切字のB類に合流した可能性もありますが、例が少なく詳細を論じることが不可能です。それでもあえて表にすれば、次の通りです。韻目は平声で代表させます。

表 3. 咸摂	鹽韻 A	鹽韻 B	嚴韻 C
牙喉音	○	■/▲/★	■/▲/★
唇音	○	■/▲/★	?

要するに、牙喉音ではB類とC類の合流が見られるが、嚴韻C類の唇音被切字自体がないので、唇音においてはC類とB類が合流したかどうかを判断する根拠がないということです。

吉池：上の表3ですが簡潔にまとめられているので、私にとっては、かえって理解が及びません。くたくたく書きますがこう言う事でしょうか。合流の方向がC類(△) > B類(□)の場合は次のようになる。便宜的に①～④を付すと、①は13により、C類 > B類を“示唆する”ので■。②は9により■。③は唇音被切字自体が無いので判断できないので?。④は14, 15により、C類 > B類を“示唆する”ので■。

表 3-1. 咸摂(C類 > B類)	鹽韻 A	鹽韻 B	嚴韻 C
牙喉音	○	①■	②■
唇音	○	④■	③?

同様に、B類(□)＞C類(△)場合は次のようになる。①は13により▲。②は9により、B類＞C類を“示唆する”ので▲。③は唇音被切字自体が無いので判断できないので？とする。④は14,15により▲。

表 3-2. 咸摂(B類＞C類)	鹽韻A	鹽韻B	嚴韻C
牙喉音	○	①▲	②▲
唇音	○	④▲	③?

同様に、CB類＞X韻(X韻を☆とする)の場合は次のようになる。①は13により★。②は9により★。③は唇音被切字自体が無いので判断できないので？。④は14,15により★。

表 3-3. 咸摂(CB類＞X韻)	鹽韻A	鹽韻B	嚴韻C
牙喉音	○	①★	②★
唇音	○	④★	③?

以上の三つの表を一つにまとめたのが表3ということですね。

中村：そういうことです。いずれの場合でも、唇音にもC類とB類の合流が生じていた可能性は排除されませんが、そもそも唇音C類がないので、平山説を確認する方法がありません。ところでC類凡韻が表にはないようです。用例がなくとも挙げる必要があります。

吉池：河野六郎(1964)は「(切韻) 鹽乙-*ïäm* と嚴(凡) -*ïem* > (慧琳) 鹽乙-*ïam*」と表記します。付された音価によると嚴と凡は同韻で声母のみが異なるように理解できます。嚴韻と凡韻はいわゆる純三等韻で原則として唇音と牙喉音のみから成るわけですが、『広韻』を眺めると傾向として、嚴韻が牙喉音声母、凡韻が唇音声母という別れ方をする印象を受けます。しかし、河野氏が凡韻を()で囲んだ意味を、私は得心のいくように理解することができません。そこで省略してしまったというのが実状です。凡(范・梵・乏)の「慧琳音義」における被切字と反切の状況は次のとおりです。

- ・平声凡韻には反切が付される被切字はない。直音が一例。帆(凡)。
- ・上声范韻には唇音被切字が二例。範(凡錢)、範(凡黯謙韻影母二等) (扶黯謙韻影母二等)。牙喉音被切字が一例。𠵼(口範)
直音：範(凡字上聲)(犯)(範)、範(範)
- ・去声梵韻には唇音被切字が三例。汎(孚梵)(孚劒)(芳梵)(芳劒)、泛(芳梵)(芳劒)(孚梵)(芳陷陷韻匣母二等)、汜(敷陷陷韻匣母二等)
直音：無し。
- ・入声乏韻には唇音被切字が一例。乏(凡法)
直音：無し

いずれもB類との合流は認められません。仮に、凡（范・梵・乏）の唇音を、表3の嚴韻Cの唇音として「？」の部分に当てはめたとしても、B類との合流は認められないので、唇音においてB類韻とC類韻の合流を認めることはできません。

中村：直音化が大部進んでいたようですね。平声の帆凡（範：凡字上聲より）、上聲の範范犯、去声の泛汎が直音となっています。

廢と祭

吉池：次は廢と祭です。

17. C類去声廢韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは14例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものは2例、他は唇音。肺（妃惠）、吠（肥惠）。惠は霽韻四等。

18. B類去声祭韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは10例。他方の、唇音にはA類被切字しかなくB類被切字は無い。

中村：廢と祭は例が少ないので、これで判断するのは難しいですね。

欣（隱・焮・迄）と眞（軫・震・質）

吉池：次は欣（隱・焮・迄）と眞（軫・震・質）です。

19. C類平声欣韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは6例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

20. C類上声隱韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

21. C類去声焮韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは2例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

22. C類入声迄韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは5例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

23. B類平声眞韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは2例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものが3例。頻（毗寅）、嘖（毗寅）。閏（武巾）。寅は羊母開口四等。巾は見母開口B類。C類と合流している2例には当たらない。

24. B類上声軫韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものが9例。全て于母の殞で明母被切字の下字。

25. B類去声震韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは9例。他方の、唇音にはA類被切字しかなくB類被切字は無い。

26. B類入声質韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは1例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものは0例。下字は全て唇音。

中村：C類(△) > B類(□)、B類(□) > C類(△)、BC類 > X韻の場合、それぞれ次のとおり。B類牙喉音被切字の下字がC類と合流しているものは23, 25, 26であるから①は■/▲/★。C類牙喉音被切字の下字がB類と合流しているものは19, 21, 22であるから②は■/▲/★。C類唇音被切字については被切字自体がないから③は？。B類唇音被切字の下字にB類牙喉音を使用するものは23, 24であるから④は■/▲/★。なお、23.の閩(武巾)の例は重唇音被切字に軽唇音の反切上字が付けられた例で、全体としても例外になります。

表 4. 臻撰	眞韻 A	眞韻 B	欣韻 C
牙喉音	○	① ■/▲/★	② ■/▲/★
唇音	○	④ ■/▲/★	③ ?

吉池：牙喉音は合流してますね。合流の方向は分かりません。唇音の合流の有無は、欣韻Cに被切字自体がないので、判断できません。

中村：表1では臻撰は19.~26.と39.~46.の2ヶ所に分断されていますね。これは牙喉音の開合によって分けているようです。唇音に関しては、B類眞韻とC類文韻の合流について検討すべきです。

吉池：それでは、順番を換えて39.~46.における状況を以下に示しておきます。

文(吻・問・物)と諄(準・稔・術)

吉池：文(吻・問・物)と諄(準・稔・術)は次のとおりです。

39. C類平声文韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音の反切下字に牙喉音を使用するもの8例。下字は全て于母(雲、云)。

40. C類上声吻韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは4例。他方の、唇音の反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

41. C類去声問韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは1例。他方の、唇音の反切下字に牙喉音を使用するもの2例。于母の運と影母の愠。B類韻と合流している牙喉音は、于母ではなく見母の摺なので、牙喉音被切字と唇音被切字とは直接には結びつかない。

42. C類入声物韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは4例。他方の、唇音の反切下字に牙喉音を使用するもの1例。黻(甫忽)、忽は沒韻曉母一等。ただし、上田氏は黻に対して「玄應甫物反」と注記する。物は微母字。あるいは、忽は物の誤字であるかもしれない。

43. B類平声諄韻に牙喉音被切字は無い。他方の、唇音被切字も無い。

44. B類上声準韻の牙喉音（蝻 1 例のみ）でC類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音被切字は無い。

45. B類去声稔韻に牙喉音被切字は無い。他方の、唇音被切字も無い。

46. B類入声術韻に牙喉音被切字は無い。他方の、唇音被切字も無い。

これを表にすると次のとおりです。C類(△) > B類(□)、B類(□) > C類(△)、BC類 > X韻の場合のそれぞれについて記号を付すと次のとおり。B類牙喉音被切字の下字がC類と合流しているものは無いので①は？。C類牙喉音被切字の下字がB類と合流しているものは40, 41であるから②は■/▲/★。C類唇音被切字に牙喉音を使用するものは39, 41, 42であるから③は■/▲/★。B類唇音被切字については被切字自体がないから④は？。

表 5. 臻撰	諄韻 A	諄韻 B	文韻 C
牙喉音	○	①?	②■/▲/★
唇音	○	④?	③■/▲/★

中村：諄韻はもともと切韻では眞韻に含まれていたもので、広韻では合口の重紐A類だけが諄韻として独立しています。したがって表 5. の「諄韻 B」の項には「眞韻合口 B」が充てられるべきです。40. と 41. と 42. で牙喉音がB類と合流しているとあるのは、反切下字が眞質韻でしょうか。もしそうであれば、表 4. と表 5. を統合した場合、唇音でもB類とC類が合流していた可能性が出てきます。

吉池：40 と 41 と 42 は次のとおりです。

・40 のC類上声吻韻の牙喉音でB類韻と合流している4例は、蘊（氳殞）（氳殞）（紆殞）、緝（氳殞）。殞は上声軫韻（平声は眞韻）于母合口B類。

・41 のC類去声問韻の牙喉音でB類韻と合流している1例は、拮（軍殞）。殞は上声軫韻（平声は眞韻）于母合口B類。声調が合わない。

・42 のC類入声物韻の牙喉音でB類韻と合流している4例は、掘（群颯）。欸（輝筆）。鬱（憚颯）、蔚（威颯）。颯は入声質韻于母合口B類、筆は入声質韻幫母B類。

反切下字は、眞韻B類はないが、それと相配する上声軫韻B類、入声質韻B類です。

中村：そうすると表 5 の、②の牙喉音は眞質韻B類と合流しており、③はその牙喉音を反切下字として使用しているので眞質韻B類と合流していたと見ることができます。そうであるならば、表 5 の③■/▲/★を、表 4 の③?と入れ替えて下の表のように理解することができます。

表 4+5. 臻撰	眞韻 A	眞韻 B	欣韻 C
牙喉音	○	①■/▲/★	②■/▲/★
唇音	○	④■/▲/★	③■/▲/★

吉池：臻攝は、牙喉音においても唇音においてもB類とC類が合流していた。しかし合流の方向は分からないということですね。

之（止・志）・微（尾・未）と支（紙・寘）・脂（旨・至）

吉池：次は之（止・志）・微（尾・未）と支（紙・寘）・脂（旨・至）です。

27. C類平声之韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは10例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

28. C類上声止韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは0例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

29. C類去声志韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは1例。他方の、唇音には被切字自体が無い。

30. C類平声微韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは11例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

31. C類上声尾韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは5例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

32. C類去声未韻の牙喉音でB類韻と合流しているものは6例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの2例。翡（肥畏）、蚌（父畏）。畏は影母。

33. B類平声支韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは15例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものが2例。羆（鄙宜）、宜は疑母。糜（美爲）、爲は于母。C類と合流している15例には当たらない。

34. B類上声紙韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは19例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

35. B類去声寘韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは6例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するものが1例。諛（彼寄）、寄は見母。C類と合流している2例には当たらない。

36. B類平声脂韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは7例（内、羊母5例）。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

37. B類上声旨韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは14例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの0例。下字は全て唇音。

38. B類去声至韻の牙喉音でC類韻と合流しているものは14例。他方の、唇音には反切下字に牙喉音を使用するもの2例。秘（悲記）、及び響（碑愧）。記はC類志韻見母なのでC類との合流が見られる。愧は見母合口で、愧（歸畏）とあり（畏は未韻でC類）、これもC類と

の合流を示す。

中村：止摂の 38 は興味深い。秘（悲記）は、B類唇音被切字の下字にC類字を使用する。牙喉音被切字においてC類韻とB類韻の合流の例は数多いが、唇音被切字において合流を示すのはこの一例のみです。しかも、嚮（碑愧）の反切下字に使用されている牙喉音“愧”もC類韻と合流を示すものです。B類去声至韻の唇音被切字には、C類との合流を示すものが2例あることとなります。

吉池：B類去声至韻は、唇音被切字にあっても、牙喉音被切字にあっても、C類韻とB類韻が合流していた可能性があるということなのでしょう。

中村：止摂は、牙喉音では全体的にC類とB類の合流が起こったと見てよさそうです。唇音の場合も、32. C類去声未韻の2例と35. B類去声寘韻の1例、そして38. B類去声至韻の2例をすべて有効と見れば、やはりC類とB類は合流していたということになるのでしょうか。以下の通りです。合流の方向は分かりません。之韻は唇音なし。韻目は平声で代表させます。

表 6. 止摂 支脂韻A 支脂韻B 微韻C

牙喉音	○	■	■
唇音	○	■	■

これはかなり甘い見通しです。実際には声調ごとに状況が異なるかも知れません。しかし、この止摂においては、平山説が成立する可能性があるということです。

吉池：合流を示す記号■は便宜的なもので、■（C類>B類）、▲（B類>C類）、★（C B類>X韻）のいずれとも決め難いということですね。

それでは次にこれまでの議論をまとめましょう。

6. まとめ

中村：我々のこれまでの作業はC類とB類の合流をもって軽唇音の音韻的独立とみなすという平山説の確認と検証が目的です。

吉池：そのために、C類元（阮・願・月）とB類仙（獮・線・薛）、C類嚴（儼・釅・業）とB類鹽（琰・豔・葉）、C類廢とB類祭、C類欣（隱・焮・迄）・文（吻・問・物）とB類眞（軫・震・質）・諄（準・稔・術）、C類之（止・未）・微（尾・未）とB類支（紙・寘）・脂（旨・至）について確認しました。

中村：なかなか興味深い結果となりましたね。

吉池：山摂のC類元（阮・願・月）とB類仙（獮・線・薛）は次のとおりです。平声で代表

します。合流の方向としてC類>B類は認められない。▲はB類>C類、★はB C類>X韻（X韻を★とする）です。

表 7. 山撰	仙韻A	仙韻B	元韻C
牙喉音	○	▲/★	▲/★
唇音	○	□	▲/★

中村：B類>C類、B C類>X韻のいずれにしても、牙喉音被切字にあっては仙韻Bと元韻Cの合流が認められるけれども、唇音被切字にあっては仙韻Bと元韻Cの合流は認められません。

吉池：咸撰のC類嚴（儼・醜・業）とB類鹽（琰・豔・葉）は次のとおりです。■はC類>B類、▲はB類>C類、★はB C類>X韻です。

表 8. 咸撰	鹽韻A	鹽韻B	嚴韻C
牙喉音	○	■/▲/★	■/▲/★
唇音	○	■/▲/★	？

中村：B類>C類、C類>B類、B C類>X韻のいずれにしても、牙喉音被切字にあっては鹽韻Bと嚴韻Cの合流が認められる。しかし、唇音被切字にあっては嚴韻C類に唇音被切字自体が無いので？であり、鹽韻Bと嚴韻Cの合流の有無に言及することができない。凡（范・梵・乏）を加えても、やはり唇音の合流については論じられない。

吉池：臻撰のC類欣（隱・焮・迄）とB類眞（軫・震・質）、C類文（吻・問・物）とC類諄（準・稕・術）は次のとおりです。■はC類>B類、▲はB類>C類、★はB C類>X韻です。

表 9. 臻撰	眞韻A	眞韻B	欣韻C
牙喉音	○	①■/▲/★	②■/▲/★
唇音	○	④■/▲/★	③？

	諄韻A	（諄韻B）	文韻C
牙喉音	○	①？	②■/▲/★
唇音	○	④？	③■/▲/★

中村：下段の②の文韻C・牙喉音と③の唇音は、眞質韻B類と合流していたことが分っている。この③の唇音を、上段の欣韻C・唇音の③？に当てはめて、臻撰ではB類とC類が合流していたと見ることができます。その場合、平山説が成立することになります。

吉池：止撰のC類之（止・未）・微（尾・未）とB類支（紙・寘）・脂（旨・至）は次のとお

りです。■はC類>B類、▲はB類>C類、★はBC類>X韻です。

表 10. 止撰	支脂韻A	支脂韻B	微韻C
牙喉音	○	■/▲/★	■/▲/★
唇音	○	■/▲/★	■/▲/★

中村：この止撰においても、平山説が成立する可能性があるということですね。

吉池：表 8 の咸撰は用例が不完全ではありますが、あるいは表 10 と同様であるかもしれません。

中村：以上により、牙喉音被切字と唇音被切字の状況を概観すると次のようになります。

全ての撰において牙喉音ではB類とC類が合流していた。なお合流の方向は分からない。ただし山撰ではおそらくC類>B類は無かった。

山撰の唇音においてはB類とC類の合流は見られない。臻撰及び止撰の唇音においてはB類とC類の合流が見られる。ただし、止撰においては唇音被切字の反切から直接合流が確認できるが、臻撰の場合は牙喉音の反切下字を介して間接的に合流が確認できるものである。咸撰、蟹撰の当該韻においてもB類とC類の合流の可能性は皆無ではないが用例に制限があり確かなことは言えない。

吉池：C類韻とB類韻の合流（C類>B類）をもって軽唇音の音韻的独立とみなすという平山説は、臻撰及び止撰においてのみ認め得る。ただし、合流の方向は分からないので、平山氏が提示したC類>B類は、三つある可能性の一つということになります。

中村：平山久雄(2022:158)はB類=C類とし合流の方向は明示しないので、この点は考えが変わったのでしょうか。もともと、同書 162 頁には次のようになっています。

切 韻	慧 琳
「悲」(脂平幫B) /piei 平/ [pɿi]	[pɿi] /piəi 平/ (幫)
「非」(微平幫) /piɿi 平/ [pɿəi] > [pfɿəi] > [fɿi] /piəi 平/ (非)	

吉池：これによるとB類>C類ですね。

中村：先に表 1 から得た感触では、牙喉音ではC類とB類は合流していたが、唇音では止撰以外には合流を確認できないということでした。その後、反切を精査することにより臻撰でもC類とB類の合流が確認できました。平山久雄(1967)では、C類とB類の合流をもって、軽唇音が音韻的に独立したとし、臻撰の分（C類）と斌（B類）をミニマルペアとして例示しました。慧琳音義の反切を調査したところ、そのような方法は、牙喉音音節の全てと唇音音節の一部（臻撰及び止撰）において適用が可能です。臻撰及び止撰の唇音においてはB類と

C類の合流が見られるものの、山摂、咸摂、蟹摂の当該韻においてはB類とC類の合流の可能性は皆無ではないが用例に制限があり確かなことは言えません。

吉池：C類とB類の合流をもって軽唇音が音韻的に独立したとする平山氏の説を検討しました。「慧琳音義」でC類とB類の合流が確認できる摂は限られたものであるということを確認し補足とすることができました。なお、軽唇音が音韻的に独立した条件については、どのような音韻観に立つかという別の話になります。今回は平山説をめぐっての補説ですので、ここまでとしましょう。